

夜直やちよく
(王安石おうあんせき)

金炉きんろ 香こう 尽つきて 漏声ろうせい 残ざんす

剪剪せんせんたる 軽風けいふう 陣陣じんじん 寒さむし

春色しゅんしよく 人ひとを 悩なやまして 眠ねむり 得えず

月つきは 移うつって 花影かえい 闌干らんかんに 上のほる

金爐香盡漏聲殘 剪剪輕風陣陣寒
春色惱人眠不得 月移花影上闌干

解説 作者が宰相になる前、翰林学士として宿直とくのちしたとき、宮中の春の夜の景を詠った詩。

語釈 ※夜直やちよく＝宮中に宿直すること。※金炉きんろ＝美しい香炉。

※漏声ろうせい＝水時計の音。※残ざん＝かすかになる。※剪剪せんせん＝風がひとしきりそよいでくる様子。陣陣じんじん＝一陣の風というように、時間のひとくぎりのこと。※春色しゅんしよく＝春めいた様子。※眠不得ねむり＝眠りにつけない。

通釈 美しい香炉の香も尽きて、時をきざむ水時計の音もしだいにかすかになってゆく。そよそよと吹く微風に、ひとしきり夜の寒さが感じられる。春の気配は人の心を悩ませ、眠りにつくことができない。そのうちに、時は移って、月は傾き、その月光に照らされた花の影が欄干のところまで、昇ってきた。